

おいしいものさがし

ナタリー・バビット作 越智道雄 訳



富山房

おいしいものさがし

ナタリー・バビット作
越智道雄訳



富山房

ナタリー・バビット

おいしいものさがし

定価 690円



訳者 越智道雄
発行人 坂本起一

1971年12月20日 第一刷

本文印刷 株式会社 文弘社
オフセット印刷 株式会社 集美堂
製本 富士製本株式会社

発行所 富山房

東京都千代田区神田神保町1の3 郵便番号101
電話東京 (03) 291-2171〜7 振替 東京 54529

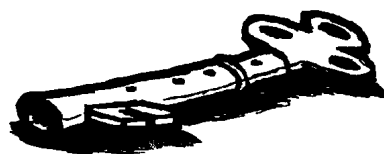
© by Michio Ochi, Printed in Japan. 1971
(落丁・乱丁はおとりかえいたします)

8097-897008-7313

わたしは、グレース・C・ルートにお礼をい
っておかねばならない。グレースは、この物
語に出てくる、いろいろな木、植物、小鳥、
魚のことをしらべる手伝いをしてくれた。興
味をもってねっしんにやってくれたから、わ
たしたちはたいへん仲よくいっしょに仕事を
することができた。このことについても、お
礼をいっておきたい。グレースがいてくれな
かったら、読者のみなさんにとって、この物
語はずっとつまらないものになっていたこと
だろうし、また、このわたしも、ずっと浮か
ぬ日々をすごしていたことだろう。

おいしいものがし

プ
ロ
ロ
ー
グ



それは、地球^{ちきゅう}ができて間^まもない、大むかしのこと。そのころは、地球^{ちきゅう}をあちらこちらほりおこしたり、切りくずしたりする人間^{にんげん}は、まだひとりもいなかった。人間^{にんげん}が、町^{まち}や城^{しろ}をつくったり（もつとも、それは、しばらくすると、ほとんどかならずといっていいほどこわれてしまうのだが）、やっかいなけんかをひきおこしたり、めんどうなパーティをひらいたりしたの
は、もっとずっとのちになってからのことだ。しかし、その大むか

しからもう地球には生き物がいて、それぞれきまつたところにすみ、そこをいつもきれいにしていた。たとえば、山には小人たち、森には森の精、みずうみには人魚、そしてもちろん、空には風の精がいたのである。

そのころ、地球上のあるところに、ぐるりを山にかこまれた、とてもかわいた、ほこりっぽい土地があった。そこには、風の精や小人たちはいたけれど、みずうみがひとつもなかったから、人魚はいなかった。それに、こんなかわいたところには森もできなかったので、森の精もいなかった。

ところが、この土地にふしぎなことがおこった。ある日のこと、ひとりの小人が山のなかで、鉱石をほるのにてごろな場所をさがしながら、つるはしで穴をほっていた。その小人はどんどんほっていったので、そこにはとてもふかい穴ができた。それでもまだほりつづけていくと、その穴にすんだ水がわきだしたのだ。びっくりした小人が、あわてて仲間にしらせにいくと、仲間の小人たちみんなが、その泉を見にかけてきた。小人たちは泉がたいへん気に入ったの

で、そのうえにおもい石をつみあげて、りっぱな家をたてた。そして、ひらた
い石でとくべつなとびらをつくり、それを、やはり石をきざんでつくったちよ
うつがい、ちゅういぶかく、しんちようにとりつけた。それから、ひとりの
小人が小さな石で笛をつくった。その笛は、とてもたかい音がして、それでひと
つのきまった曲をふくと、その音色で石の家のとびらがひらき、またふくと、
こんどはとびらがしまるのだった。小人たちはかわるがわるその笛をあずかっ
て、泉の水をいつもすんだきれいなものにしておこうと、いっしょうけんめい
努力した。

けれども、小人たちが見つけた泉は、がけでかこまれた土地の底にあったの
で、わきでた水はだんだんたまりはじめ、しばらく時がたつうち、そこは小さ
なみずうみになった。そして、みずうみのまん中には、あの石の家の屋根が、
まるで島のようにひよっこりつきでいたのだ。みずうみはどんどん水かさを
ましていった。なん年かあとには、泉の家はすっかり水底にすんでしまい、

小人^{こびと}たちはそこにおりていくことができなくなってしまった。それでも、すんだ水をのぞきこめば、泉^{いずみ}の家^{いえ}を見ることができたし、まえとおなじように、あの笛^{ふえ}でとびらをあげたてすることもできた。

やがて、みずうみには、水からしぜんに生まれでた生き物^{もの}が、たくさんすみつくようになった。そのなかに、ひとりのかわいらしい小さな人魚^{にんぎょ}がいたのだ。小人^{こびと}たちは、この人魚^{にんぎょ}にアルデイスという名^なまえをつけた。そして、ひとりの小人^{こびと}が、アルデイスにかわいい人形^{にんぎょう}をつくってやった。その人形^{にんぎょう}は、石をいくつかつないでつくったもので、頭^{あたま}には、髪^{かみ}の毛がわりに、ながいシダの葉^はがとめつけてあった。アルデイスは、その人形^{にんぎょう}がたいへん氣^きにいつて、いつもそれとあそんでいた。そして、人形^{にんぎょう}をつくってもらったおかえしに、小人^{こびと}たちにひとつの約束^{やくそく}をしたのである。それは、いまはもうふかい水底^{みずそこ}にすんでしまった石の家^{いへ}にある泉^{いずみ}の番^{ばん}をすることだった。そこで小人^{こびと}たちは、アルデイスにあのとくべつな笛^{ふえ}をあずけた。アルデイスはそれにくさりをつけて、みずうみ

のほとりのとがった小さな岩^{いわ}にかけておいた。まい朝^{あさ}、アルデイスは、笛^{ふえ}をふいてとびらをあげると、水底^{みずそこ}にもぐっていった、石の家^{いえ}のなかにわいてくる泡^{あわ}にまじって人形^{にんぎょう}とあそんだ。そして、夜^{よる}になると、みずうみのうえにあがってきて、また笛^{ふえ}をふいてとびらをしめてから、みずうみのどこかへねむりにいくのだった。

そのうちにも、みずうみの水かさはますますふえつづけ、ついにはがけにできたV字^{ツイジ}形のさけ目^{かた}からあふれだして、山にかこまれた、かわいてほこりっぽい土地^{とち}へと、どんどんながれくだっていった。その流れ^{なが}は、たくさんの川にわかれて土地^{とち}をうるおしたので、たちまち、あたりいちめんみずみずしいみどり色^{いろ}になった。やがて、そこには森^{もり}がいくつかできて、木の番^{ばん}をする森^{もり}の精^{せい}がやってきた。そして、もっとあとになると、人間^{にんげん}がつぎつぎにすみつくようになったのである。人間^{にんげん}たちは、町^{まち}をいくつかつくり、ひとりの王^とがその土地^{とち}をおさめるようになった。そして、人間^{にんげん}たちは、かぞえきれないほどのけんかやも

めごとをくりかえしたが、まるでそれがたのしみであるかのようで、というのも、それらはみんな、じぶんたちがかってにひきおこしたもののばかりだったからだ。小人たちは、山の番をやめて、山の地下にひきこもり、そこであいかわらず鉱石をほりつづけていたが、もうほとんどそとへは出てこなくなった。やがて、小人たちは二、三人の仲間にわかれて、それぞれすきなところで鉱石ほりをするようになり、みんながいつしよにくらすことはなくなった。ものしりなことでゆうめいな森の精は、木のうえにすんでいて、人間の質問にこたえるために、ときどき地上におりてきたが、しばらくすると、人々の質問がいつもあまりくだらないので、だんだんいや気がさしはじめ、めったに返事をしなくなった。それで、人間たちも、質問をしにこなくなってしまったのである。

さらに、アルデイスの身のうえに、たいへんかなしいことがおこったのだ。ある日のこと、泉の家で人形とあそんでいると、耳なれない、たのしげな音が聞こえてきた。アルデイスは、人形をおいて、みずうみのうえへとおよいでい

った。岸きしには、ひとりの男おとこがすわっていた。アルデイスは一度ひとも人間にんげんの男おとこを見たことがなかったのだ。男おとこはぴんと糸いとをはったまろい箱はこで、うつくしい音楽おんがくをかなでていた。アルデイスは、その場ばにとどまって、すいれんのかげに身みをかくし、目と耳みみだけ水からだして、じっとその音色ねいろに聞きほれていた。しばらくすると、男おとこはまろい箱はこをわきにおき、水をもうと身みをかがめたとたん、とがった小さな岩いわにぶらさがっている笛ふえに気がついた。男おとこは、笛ふえをとりあげてふいてみたが、かれはただの人間にんげんだったので、笛ふえはなっているのに、その音おとは聞こえなかった。アルデイスがとほうにくれて見みまもっていると、男おとこは、笛ふえをいったんすてようとしたけれど、ちよつとためらってから、またそれを見みなおし、とうとうじぶんの首くびにかけてしまったのだ。それから、あのきみのような楽器がっきをとりあげて、どこへともなく立ちさっていつてしまった。アルデイスは、まっで、とさけんだが、男おとこにはもう聞きこえなかった。

アルデイスは、ふるえながら、泉いずみの家いえへともぐっていった。だが、男おとこのふい

た笛ふえの音おとで、とびらはびしやりとじてしまっていたのだ。もう泉いずみの家いえにははいれなくなっていた。岩いわのわれ目からのぞいてみると、家いえのなかにあの人形にんぎょうが見えた。けれども、それをとりだす方法ほうほうは、なにひとつ見あたらなかった。それからというものの、アルデイスはいつもかなしみにくれるようになった。夜よるになると笛ふえのあったところへおよいでいき、なん時間しかんも泣ないた。だれかが、あるときその泣き声なきこえを聞きいて、アルデイスのかなしい物語ものがたりを歌うたにしたが、だれもアルデイスをたすけてやることはできなかった。かんじんの小人こひとたちがみずうみによりつかなかったからだ。

いっぽう、山のふもとの国くにでは、いくつもの町まちがつくられてはやきはらわれ、またつくられていた。そして、いく人も王やそのけらいの国民こくみんが、ここで一生いっしょうをおくり、なん年ねんもなん年ものながいあいだ、あきもせずもめごとをくりかえした。アルデイス、小人こびとたち、森もりの精せいなどは、物語ものがたりや歌うたにのこっているだけで、すっかりわすれられてしまっていた。もうだれも、かれらがほんと

うにいるなどとはしんじなくなっていたのだ。ただ、ときたま、かれらはほんとうにいるのだ、としんじる子どもがいた。また、めったにないことだが、悪^{あく}人がそうしんじることもあった。なにしろ、この世^よの中には、わたしたちがまあい日目^ににしているありふれたふしぎより、もっとふしぎなこともあるのだ、としんじられるほどの想像^{そうぞう}力^{りきよく}をもちあわせているのは、子どもと悪人^{あくにん}だけだからなのである。